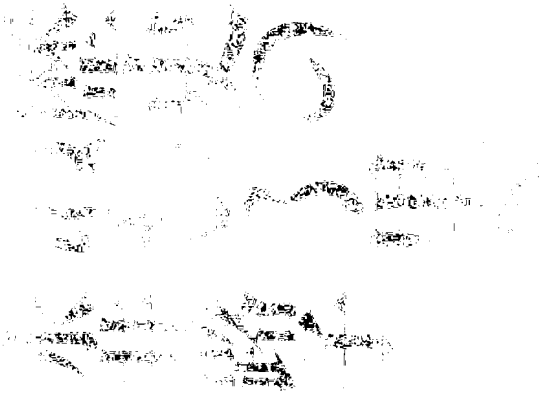
歴史のいとぐち

永井路子



永井路子（ながい・みちこ）
大正十四（一九二五）年、東京に生まれる。東京女子大学国語専攻部卒業。小学館編集部勤務を経て文筆業に入る。昭和三十九年、『炎環』で直木賞受賞。昭和五十七年、『氷輪』で女流文学賞受賞。
歴史に対する新鮮な解釈、確かな歴史考証には定評があり、昭和五十九年、「難解な史料を駆使して中世を扱った歴史小説に新風をもたらした」功績で菊池寛賞を受賞。
著書には、『北条政子』『流星――お市の方』『乱紋』『この世をば』『つわものの賦』『美貌の女帝』などのほか多数がある。

歴史のねむる里へ

一九八八年三月三日　第一版第一刷発行

著者　永井路子

発行者　江口克彦

発行所　PHP研究所

東京事務所　千代田区三番町三―十
〒一〇二　☎〇三（二三九）六二二一

京都本部　京都市南区西九条北ノ内町十一
〒六〇一　☎〇七五（六八一）四四三一

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

© Michiko Nagai 1988 Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えさせていただきます。

ISBN4-569-22196-3

歴史のねむる里へ……目　次

奈良

東大寺・秘められた皇后の悲願　9

古都のあけぼの
幸運のかげに
運命のまがりかど
血ぬられた王座へ
大仏開眼

飛鳥

香久山は畝傍を愛しと……　25

飛鳥路の旅は
なげきの女帝
幻の宮殿
愛と悲しみの川
謎の石たち

吉野

王朝の幻と謎を追って　39

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

幻の大寺
里の寺、山の寺
壺阪越え
吉野山にて
道長は山上に登ったか
滝の巡礼

大坂

秀吉をめぐる女人たち　63

大坂城物語
宿命の城
黄金のベッド
華麗な地獄図
却火はふたたび、三度（みたび）

京都

古典文学に描かれた町　79

清少納言も歩いた道

兼行法師の見た紅葉
宇治は貴族の別荘地
建礼門院の心境

近江(一)

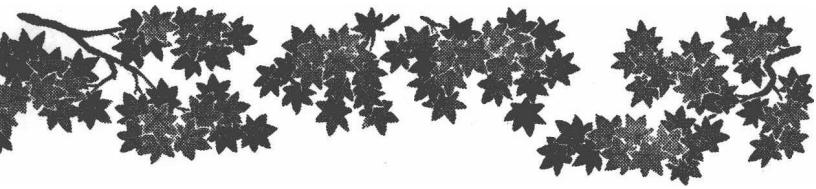
壬申の乱を旅する　93

脱出――近江から宇治へ
吉野の山ふところへ
大長征

近江(二)

近江観音寺城をゆく　113

祖母ヶ昔
六角氏の居城
みごとな立体的城下町
六角承禎の悲劇
姿を現わした幻の名城



箱根

箱根越え・山路の変遷 145

古くは日本武尊が越えた〝碓日峠〟
騎馬ギャング団のいた足柄道
女性には恐怖と危険の湯坂道
力士と芸人はフリーパスだった関所

鎌倉(一)

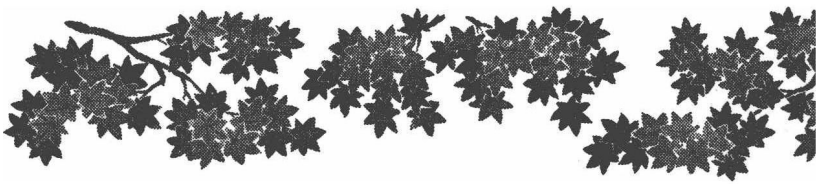
北条氏興亡の跡 163

血と権謀
城館とやぐら
山の道、海の道
追憶と鎮魂
落日

鎌倉(二)

海辺の歴史散歩 179

十一面観音の伝説



鎌倉(三)

広重の描いた富士山
鎌倉入りの許し

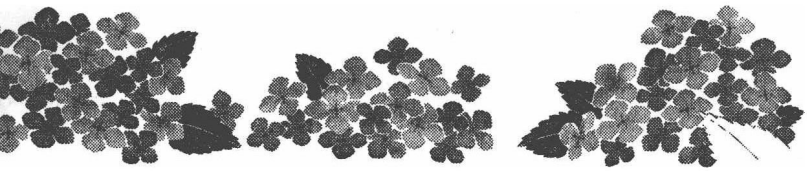
駈込寺の女人たち　191

二つあった縁切寺
よくある二つの誤解
姑の嫁いびりも原因
駈込みの方法と順序
権威ある寺法書
寺内の待遇
寺を利用した女も
縁切寺の由来

鎌倉(四)

谷(やと)をめぐる　213

山ふところの行きどまり
比企谷の惨劇

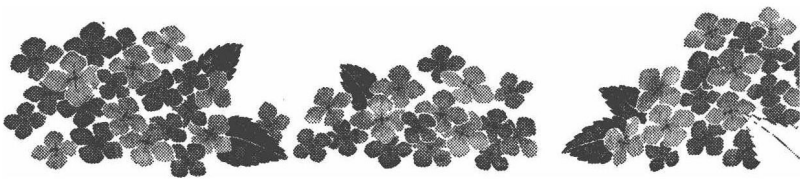


鎌倉の苔寺
花の谷、明月谷

鎌倉(五)

鶴岡八幡宮今昔
大公孫樹
みつめてきた歴史の底
源頼朝の初詣で
おうばんぶるまい

あとがき

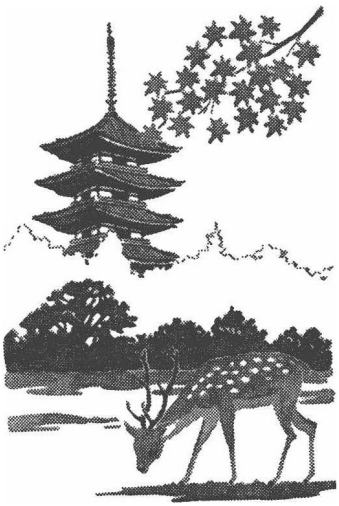


本文カット・茨木祥之

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

奈良

東大寺・秘められた皇后の悲願



古都のあけぼの

音――ともいえない、かすかなものの気配で目をさました。奈良のホテルで朝をむかえたときのことである。夢かしらと、いぶかりながらカーテンをひいたとき、思いがけない訪問者を見た。人おじしない、やさしいひとみの鹿が二匹、じっとこちらをみつめていた。

――まあ、こんなところにまで鹿が……。

ついさそわれて外に出た。朝寝坊の私が、思いがけず、早朝の奈良を歩く気になったのは、この、かわいい訪問者のおかげだった。

町はまだ眠っていた。翡翠色に静まりかえった池は、薄く濃く木立の影をうつし、松の梢を伝わって、かすかに読経の声が聞こえてくる。昼間のさわがしい「観光奈良」の表情は消えて、そのかみの「ならのみやこ」が、ふいに顔をみせた感じだった。

松の緑の中に、東大寺の南門が見えてきた。

そして、大仏殿の大屋根も――。バスやラジオ、マイクなどの騒音を一切はぎとって静まりかえる東大寺。その壮大さと威厳をこれほど膚に感じたことはなかった。早起きをしてよ

かったと思う。観光バスでいくつもの寺を走りまわるよりも、朝まだき、足にまかせてそぞろ歩きをするほうが、どんなに深く古都のいのちにふれることができるかわからない。

南大門をふり仰いだとき、私の胸に強く迫ってきたのは、ひとりの女性のイメージだった。東大寺を建て、大仏造立にいちばん力をつくしたその人の名は光明皇后。第四十五代、聖武天皇のおきさき、〝咲く花の匂うがごとし〟といわれた華麗な奈良朝を代表するトップ・レディである。

じつをいうと、私は、その生涯のきらきらしさのゆえに、光明皇后というひとをこれまで好きになれずにいた。が、この朝、緑の静寂の中で東大寺を眺めたとき、その華やかさの裏に秘められた、女としての苦悩が、突然、ひしひしと胸に迫ってきたのである。

幸運のかげに

光明皇后は、少女時代の名を安宿媛といった。光明子ともよばれたらしい。かわいい少女だった。頭はよかったが、とびぬけて美貌でもなかったらしい。伝説では、光り輝くほど美しかったことになっているが、確実な史料には、美人だったとは一行も書いてない。幼いこ

ろ市へ行って商人たちに秤の使い方を教えたという。これも伝説にすぎないが、どうやら、ひっこみ思案の箱入り娘ではなくて、なかなか積極的な少女だったようだ。

父は藤原不比等。宮中で権力のある高級官吏。母の橘三千代も、文武、元明、元正と、歴代の天皇に仕える高級女官だった。いわば彼女は、地位にも富にもめぐまれた、ハイ・ソサエティのお嬢さまだったのである。

十六歳のとき、縁談が起こった。相手は同い年の皇太子首皇子である。願ってもないしあわせと、周囲の祝福をうけて、彼女は幸福な結婚へ——。ハイ・ソサエティの令嬢としては、まずまず順調な人生への門出だった。

十六歳の花嫁、花婿。ままごとのようにかわいく、きれいな新婚生活だったに違いない。そのころの奈良の朝廷といえば、豪奢な中国風の建物だった。青い屋根、白い壁、赤い柱。しかも生活様式は椅子、テーブルでベッドを使っていたのだから、平安時代などよりはむしろ現代に似ている。そういえば、女の人も絹のスカートに絹の上着、ストールを巻き、しゅうのある靴をはき、金や宝石のイヤリングやネックレス、ブレスレットをつける、というぐあいだから、現代そっくりだといってよい。

幸福のシンボルのようなかわいいプリンセス！　が、この安宿媛の人生のスタートのそのとき、早くも小さな翳がつきまとっていた。このとき、すでに首皇子にはもうひとりのおき

さきが、あったのである。

運命のまがりかど

もうひとりのおきさきの名は広刀自(ひろとじ)といった。県犬養唐(あがたいぬかいのから)という官吏の娘である。この人は安宿媛の父不比等のような高級官吏ではない。このころ、おきさきが何人もいるのがふつうだった、とはいえ、安宿媛にとって、ゆかいなことではないはずだ。

しかも、そのうち、ライバルの広刀自がみごもってしまった。

――これは一大事！

ショックをうけたのは、彼女よりも、むしろ不比等や三千代ではなかったろうか。

だいたい不比等は、天皇の姻戚(いんせき)になることで、ここまでのしあがってきた男である。彼の先妻の娘、宮子(みやこ)は、さきに文武天皇のきさきになり、男の子を生んだ。これが首皇子である(だから安宿媛との結婚は、叔母と甥の結婚になるわけだが、当時はこんなことはよくあった)。以来、不比等の宮中での勢力はにわかに強まったのだから、今度の安宿媛の縁組も、当然それを計算に入れてのことだった。

――なのに、ほかのきさきに男の子が生まれてしまっては……。

不比等や三千代がやきもきするうちに広刀自は産み月を迎えた。生まれたのは幸か不幸か女の子だった。のちの井上内親王である。

そしてまもなく――。

こんどは、安宿媛がみごもった。

――男の子を、なにとぞ……。

不比等も三千代も、必死で願ったに違いない。しかし、これも生まれたのは女の子だった。父と母の、失望をかくそうともしない表情を見たとき、安宿媛は、自分に与えられた皇太子妃の座が、決してなまやさしいものでないことに気がついたはずである。

それからまもなく、不比等は娘の気を気づかいながら死んでしまった。安宿媛が二度めにみごもったのはその数年後、夫の首皇子はすでに即位していた。聖武天皇である。この二度目の出産で、媛はついに男の子を儲けた。聖武天皇も、三千代も、媛の兄たちも大よろこびで、生後二カ月もたたないうち、早くも皇太子に定められた。こんな小さな赤ちゃんが皇太子になるというのは、これまで例のないことである。順調にいけば、これで安宿媛の最初のつとめはすんだわけだった。自分の生んだ皇子がいつかは即位し、彼女はその母として、幸福に、しかし、歴史にはほとんどその名も止めずに消えてゆく。歴代天皇の母后と同じ運命

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c